

自由論題 2「中国の地方と少数民族」・報告 2

報告テーマ

華国鋒と少数民族  
Hua Guo Feng and Ethnic Minorities

氏名(所属)

木下光弘(敬和学園大学)

要旨(800字程度)

2008年に華国鋒が亡くなり、それからおよそ十年が経った。彼が中国政治の頂点に君臨した期間は極めて短く、このため毛沢東や鄧小平らに比べると、その存在感はどうしても見劣りしてしまうように思える。

ただし、文化大革命を事実上、終結させ、文革的な諸政策の転換に果たした彼の役割の大きさは、今日では改めて見直されるようになってきた。「1978年画期説の再検討」などもその一環であった。ところが、中国民族問題研究においては、華国鋒政権下での民族政策について論じられる機会がほとんどなかった。それどころか、一部では、華国鋒は民族問題に詳しくなかった、とまでいわれている。

本報告では、まず華国鋒の経歴を改めて見直すことで、中国共産党主席の座に就く以前から民族問題にかかわりのある立場であったことを確認する。その後、1976年に毛沢東から権力を継承するが、この頃の華国鋒が少数民族に対してどのような姿勢であったかについて、考察を試みる。

周知の通り、華国鋒はまず湖南省の地方幹部として頭角を現すのだが、この頃からすでに民族問題にかかわらざるを得なかったことはあまり知られていない。1970年代になり活躍の場を中央政界に移してから、1975年にチベット自治区への中央代表団の団長としてチベットへ赴いている。彼が民族問題に対して、もともと強い関心を持っていたかどうかまではわからない。だが、1978年になると主体性を持ち得た華国鋒は自ら新疆ウイグル自治区を訪問し、少数民族との対話姿勢をアピールするようになる。こうした事実は、華国鋒と民族問題について考えるうえで、注目に値する。

そのうえ、華国鋒による少数民族への関与は、単に訪問だけではない。数十万人ものモンゴル人が粛清されたとされる「内モンゴル人民革命党事件」の見直しと被害者の救済を指示するなど、具体的な取り組みもあった。そのうえ、『華主席による国内の民族問題に関する論述選編(華主席關於国内民族問題的論述選編)』と題された冊子を全国に配布していたことから、民族問題に対する彼の積極的な姿勢がうかがえる。